

## —若手技術者のコーナー—

## 与条件を設計する

## 1. はじめに

学部時代、横浜で建築・都市デザインを専攻していた私が卒業する月、東日本大震災が発生した。本格的な設計活動を開始する野望を抱いて大学院へ入学する直前の出来事で、逡巡の末、大学院では、仙台の大学と地元行政機関との連携による漁村のマスタープランづくりや復興交付金を活用した復興ビジョン策定、まちづくり支援などに携わった。

建築における与条件は、敷地や立地、近隣との関係、法規などの規制やコスト、技術的条件である。いかに規制を潜り抜け、条件を使いこなして設計するかに情熱を燃やす設計者もいるが、復興計画においては、規制の有無が意味をなさず、新たな規制が作られるなど、拠り所となる与条件が次々に変化していくような現場であったと思う。

このような状況下、計画プロセスは、まず条件を整理することから開始しなければならなかった。だが、一瞬にして生活の拠点を奪われた住民の皆様の前に立てば、目の生計、最終的な生活の形を求められた。かつての漁村の歴史を踏まえた望ましいビジョンの構築、制度やその他の条件整理、復興の最終形的设计(=デザイン)を同時に求められる過程においては、模型が非常に有効なツールであったし、これを得意とする建築家の職能を肌で感じた。



模型を元に計画を説明する筆者

この過程における重大な発見は、条件ばかりを意識して最終形を考案しても、魅力は生まれないこと、むしろ、望ましい最終形に向けて条件を作り変える思考が何よりも重要だ、ということである。これは、

制度を司る水産庁職員と現場で出会ったことによる発見であり、私が国の仕事を志した何よりの理由だ。

## 2. 現在の業務

入省6年目だが、建築・土木の専門分野よりも、ISO9001やISO14001などに代表される民間規格・認証、国際標準関係の業務を5年連続で担当している。

現在の企画課では、水産エコラベルという、FAO(国連食糧農業機関)が定めた漁業・養殖業の持続可能性を担保する仕組みを推進している。多様性に富んだ海を有する日本の水産業界の取組を、世界に訴えかけつつ、国内の事業者の取組も促進するための環境を整えることが業務の本質であると考えている。



タイ漁業省を表敬訪問(左から2番目)

## 3. 今後の抱負

私の業務における姿勢は、ビジョンを描きつつ、そこを目指して今あるべき姿を実現できる環境(=与条件)を整える(=設計する)ことである。条件が無ければ、現場が苦しむ状況を体験した身として、この志を大切にしたい。

昨年、水産庁所管の漁業法が改正された。この時はロジ担当だったため、内容はほとんど関与できなかったが、今後も国にしかできない制度設計に、ビジョンを携えて、関わっていききたいと思う。

7年ぶりに修士論文を開いた。自分の原点を振り返る機会をいただけたことに感謝したい。

(水産庁 漁政部 企画課 浜辺 隆博)